

比治山大学蔵「三島由紀夫文庫」調査報告

Research Report on “Yukio Mishima Library” in Hijiyaama University

九 内 悠 水 子

Yumiko KUNAI

This article is a survey on a special collection for Yukio Mishima, held in Hijiyaama University Library. The library possesses a series of documents, named as “Shimizu Fumio old stock”, which was donated to the university by Fumio Shimizu, a lifelong teacher of Mishima. In this survey, a list of books included in this collection was made first, and then Shimizu’s writings found in the books were reprinted. Moreover, some consideration about it was added. The book list is attached to the end of this article.

The collection includes 74 books. Among these, 43 books have the signature of the author. There are 64 books of the first edition (the first copy). When Mishima published a new book, he gifted it to Shimizu with his own writing in most cases. Shimizu used to write his memos or notes into books including those of Mishima. Such writings amounted to 21 points, and a tendency was observed that the writings were mainly added to the work in the field of criticism rather than of novels.

As the representative example of such minor cases, an attention was focused on two books, “The sound of waves” and “Five modern Noh Plays” (“Hanjo”), which belong to the genre of novels and dramas, respectively, but not of criticism. With regard to these two books, Shimizu seems to have paid attention to the word “waiting”. Mishima is known to have repeatedly used the theme of “waiting for something”, this survey suggests that Shimizu recognized the importance of this theme during the early stages of Mishima’s activities.

一. はじめに

比治山大学「三島由紀夫文庫」は、三島由紀夫の学習院時代の恩師であり、比治山短期大学学長を務めた清水文雄寄贈の三島関連資料二八〇点を元に、一九九三年、比治山大学図書館内に設置された。翌年には三島由紀夫夫人、瑤子氏から海外翻訳書の寄贈を受け、その後も資料の収集を行った結果、現在では総数一八〇〇を越える、三島由紀夫研究の一大拠点となっている。

比治山大学図書館では、これまで、一九九三年に「清水文雄先生旧蔵 三島由紀夫文庫目録」、一九九六年に「三島瑤子氏寄贈 三島由紀夫文庫目録」、二〇〇〇年・二〇〇二年に「三島由紀夫文庫通信1・2」を作成し、その資料的価値を広く内外へ公開してきた。また、その特徴と概要については、有元伸子による紹介が既にある。しかしながら、内容の精査等は未だ手つかずのままであり、今後の調査が急がれる所となっている。

文庫は、主に、清水文雄旧蔵資料（以下、旧蔵資料）、三島瑤子氏寄贈資料、三島研究に関する書籍、の三つの柱で構成されているが、ことに、旧蔵資料には、清水による書入が数多く見られる。学習院時代の三島は自作を携え、しばしば、清水のもとへ意見を求めて通った。そして作家として名をなした後も、作品が世に出る度にこれを送り届けている。清水を師と仰ぐ姿勢は終生変わらなかつた。そんな彼が三島に与えた影響は、三島文学の生成過程を追う上で、看過できない部分であろう。三島文学解明のためにも、旧蔵資料書入を含む「三島由紀夫文庫」の全貌を明らかにする必要がある。

なお、旧蔵資料には、三島本人から清水へと送られた自作戯曲の上映チケット、三島自筆のメモ書きなども含まれている。文庫の整理によって、新たな資料が発見される可能性もある。これらを保存し、活用することも、今後、三島研究を発展させていく上で、重要な作業となっていくに違いない。以上の様な現状を踏まえ、論者は現在、文庫の整理と調査にあたっている。本稿はその報告である。なお、論文末尾に旧蔵資料のうち単行本に関するリストへ表1を附した。先述したようにすでに目録は作成されているが、今回のリストは、これには記載されていない受贈日や書入の有無、署名の形状を追記したものとなっている。

二. 清水文雄旧蔵資料について

以下は、旧蔵資料のうち、単行本^{*2}の調査結果である。総数七四点、そのうち、著者署名が入ったものが四三点（名刺に手書きで「清水文雄先生」と記したものも含む）、初版（第一刷）は六四点到及ぶ。書入は二一点（挟み込まれたメモ片も含む）で見られた。全七四点のうち、三島の死後刊行されたものは一二点ある。よって旧蔵資料（のうち単行本）の約七割は三島から献呈されたものと言える。この中に『仮面の告白』や『禁色 第一部』『金閣寺』といった代表作が入っていないことにやや驚かされるが、それらを除くと、中・長編小説を刊行した際には割合まめに清水に献呈を行っていたようである。一方で、評論関係の作品についてはあまり積極的に送ることをしなかつたのだろう。^{*3}

署名は、ほとんどがペン（万年筆）で記されており、本に直接書き込まれているが、一部、名刺・半紙への署名（紙質、紙色により直接書き込み

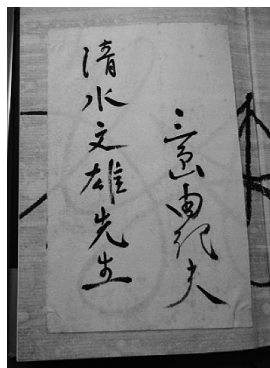


写真1
「獸の戯れ」MAMI0-27

にくいものに対して」といった形が見られる。なおこれらの多くには、清水によって受贈日が書き込まれており、中には新聞評等の切り抜きが貼り付けられてあるものもある。

書入は、丸印、チェックマーク、丸括弧括り、丸囲み、傍点、文字、と多岐に渡るが、その大部分はラインである。鉛筆で入れられたものが殆どで、稀に赤や青鉛筆、ボールペンも使用されているが、いずれの筆記具を用いた時も、筆圧は弱い。清水は書入を行うにあたって、献呈本か否かを考慮には入れていなかったようだが、その控えめな筆圧からは、三島と彼の作品に対する尊敬の念が感じられる。なお、書入は、三島著作物のうち単行本以外の、「全集・選集」、「新聞・雑誌・その他」のいずれにも見られ、傾向としては、小説よりも評論に多く付けられている。しかし、これらが附された時期を特定することは極めて困難であろう。評論に多く見られることから、献呈された、すなわち刊行されたその時にすぐ書入されたのではなく、三島の死後、彼の言葉を清水が整理し直した、という可能性もある。但し、「昭和三十九年五月十五日」に受贈された『私の遍歴時代』には、「昭和三十九年十一月六日（中略）ここからよみはじめる。」とい

たメモ書きも見られるため、献呈されてすぐに読み、書入を行ったものも少なからずあるだろうことが想像されるのである。

次節では、旧蔵資料（単行本）のうち、『潮騒』及び『近代能楽集』（「班女」）の書入を示す。先に述べたように、書入は、物語より、評論に多く附されている。そんな中、清水は、この二つの物語に共通する、あるキーワードを見出していた。

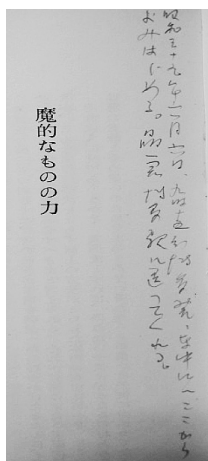


写真2
「私の遍歴時代」
MAMI0-33

三. 書入から見えるもの

以下、清水による書入部分を抽出していく。なお、本文に付けた通し番号は、論者が便宜上付与したものである。

（1）『潮騒』における書入

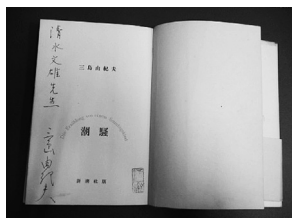


写真3
「潮騒」MAMI0-10

『潮騒』(MA Mo-10)へ一九五四・六 新潮社へは、総頁数二四〇、二〇センチ、定価二八〇円、カバー・帯付き、著者署名が黒ペンで入れられた初版本である。多少シミがあるものの保存状態は良い。本文中にはアンダーライン、欄外に丸印、チェック、文字、丸括弧等の書入が見られる。また、清水の手により「一九五四・六・一一」と受贈日の記載もある。

(1) 一昨年新制高校を出たばかりだから、まだ十八である。背丈は高く、体つきも立派で、顔立ちの稚なさだけがその年齢に適つてゐる。これ以上日焼けしやうのない肌と、この島の人たちの特色をなす形のよい鼻と、ひびわれた唇を持つてゐる。黒目がちな目はよく澄んでゐるが、それは海を職場とする者の海からの賜物で、決して知的な澄み方ではなかつた。彼の学校における成績はひどくわるかつたのである。

* 「一昨年」の行頭にチェックマーク

* 「一昨年」たのである。」まで丸括弧で括られ、その上に丸印

(2) 額は汗ばみ、頬は燃えてゐた。寒い西風はかなり強かつたが、少女は作業にほつた顔をそれにさらし、髪をなびかせてたのしんでゐるやうにみえた。綿入れの袖なしにモンペを穿き、手には汚れた軍手をしめてゐる。健康な肌いろは他の女たちと変らないが、目もとが涼しく、眉は静かである。少女の目は西の海の空をじつと見つめてゐる。そこには黒ずんだ雲の堆積のあひだに、夕日の一点の紅ゐるが沈んでゐる。

* 「額は」が沈んでゐる。」まで丸括弧で括られ、その上に丸印

* 「少女の目は西の海の空を」の下に「何かを待つ目」との書入

(3) 新治は片足を舳先に踏んぱり、足をひろげて、海の中の何ものかと永い綱引をつづけてゐる。綱はつぎつぎと手繰られる。新治は勝つてゐる。しかし海も実は負けてはゐない。嘲けるように空の蛸壺をつぎつぎと送つてよこすのである。

* 欄外に丸印

(4) ……とはいふものの、その日の漁の果てるころ、水平線上の夕雲の前を走る一艘の白い貨物船の影を、若者はふしぎな感動を以て見た。世界が今まで考へもしなかつた大きなひろがりを以て、そのかなたから迫つて来る。この未知の世界の印象は遠雷のやうに、遠く轟いて来てまた消え去つた。

* 欄外に丸印

(5) その晩、新治は青年会の例会へ行つた。むかし「寢屋」と呼ばれてゐた若い衆の合宿制度が、さういふ名に呼びかへられて、今も多くの若い衆は自分の家に寝るよりも、浜辺のその殺風景な小屋に寝泊まりすることをおんだ。そこではまじめに教育や衛生や、沈船引揚や海難救助や、また古来若者たちの行事とされてゐる獅子舞や盆踊りについて議論が闘はされ、そこにあると、若者は公共生活につながつてゐると感じ、一人前の男が肩に担ふべきものの快い重みを味はふことができた。

* 欄外に丸印

(6) 庚申様の日や祖先の命日につくるおはぎは、枕ほどの大きさがあつた。

* 欄外にチェックマーク

* 「甲」の横に「申」との書入

(7) 彼の深く吸ふ息は、自然をつくりなす目に見えぬものの一部が、若者の体の深みにまで滲み入るやうに思はれ、彼の聴く潮騒は、海の大きな潮の流れが、彼の体内の若々しい血潮の流れと調べを合はせてゐるやうに思はれた。新治は日々の生活に、別に音楽を必要としなかつたが、自然がそのまま音楽の必要を充たしてゐたからに相違ない。

* 欄外に丸印

(8) 「おれはいつか、働いて貯めた金で機帆船買って、弟と二人で、紀州の木材や九州の石炭を輸送しようと思つとるがな。そいでお母さんに楽をさせてやり、年をとつたらおれも島にかへつて、楽をするんや。どこを航海してゐても島のことを忘れず、島の景色が日本で一番美えやうに、(歌島の人はみんなさう信じてゐた)、またア、島の暮らしはどこよりも平和で、どこよりも仕合せになることに、力を協せるつもりでゐるんや。さうせんと島のことを、誰も思ひ出さなくなるによつてなあ。どんな時世になつても、あんまり悪い習慣は、この島まで来んうちに消えてしまふ。(後略)」

* 欄外に丸印

(9) 待つ思ひに我慢がなくなると、ゴムの雨合羽を羽織つて海に会いに行つた。海だけが彼の無言の対話に答へてくれるやうな気がしたの

である。激浪は防波堤の上高く立上り、おそろしい轟きを立てて潰えた。昨夜の暴風雨特報で、船といふ船はいつもよりずっと高く引き上げられてゐた。波打際は思はぬ近くに迫り、築港の内部は巨浪が退くときに、水面が急傾斜をして、ほとんど底を露はすやうに見えた。波のしぶきは、雨とまじつて新治の顔にまともにかかつた。ほてつた顔の鼻筋にかかつて流れる水の鮮烈な塩辛さが、彼に初江の唇の味はひを思ひ出させた。

* 欄外に丸印

(10) 男たちは漁へ出る。機帆船に乗つてさまざまな港へ荷を運ぶ。さういふ世界の広がりとは縁がない女たちは、飯を焼き、水を汲み、海藻をとり、夏が来ると水に潜いて、深い海の底へと下りてゆく。海女のなかでも老練な母親は、海の底の薄明の世界が女たちの世界であることを知つてゐた。昼も暗い家の中、分娩の暗い苦しみ、海底の仄暗さ、これらは一連の、おたがひに親しい世界である。

* 欄外に丸印

(11) 火のかたはらに、若者は膝を抱いて坐つた。あとは待つだけであつた。

* 欄外に丸印

(12) 安夫はさつさと我家へかへり、家ちゆうにひびきわたるラジオの浪花節をききながら父と長兄がまだ晩酌を交はしてゐる茶の間を横目に見て、二階の自分の部屋に戻ると、やみくもに煙草を喫んだ。

* 欄外(上)にチエックマーク、「P80」との書入

* 長兄の横に「?」との書入

(13) 漁夫としての経験の深さと年齢から、彼は平静に待つことを知つてゐた。

* 欄外に丸印

(14) 新治はすでに待つ辛さを十分に学んで知つてゐた。そのためには女を待たせればいいのである。しかしそれができない。母と宏が寢床に入ると、新治は外へ出た。十一時までにはまだ二時間もある。

* 欄外に丸印

(15) 今にして新治は思ふのであった。あのやうな辛苦にもかかわらず、結局一つの道徳の中でかれらは自由であり、神々の加護は一度でもかれらの身を離れたためしはなかつたことを。つまり闇に包まれてゐるこの小さな島が、かれらの幸福を守り、かれらの恋を成就させてくれたといふことを。……

* 欄外に丸印

(16) 少女の目には矜りがうかんだ。自分の写真が新治を守つたと考へたのである。しかしそのとき若者は眉を聳やかした。彼はあの冒険を切り抜けたのが自分の力であることを知つてゐた。

* 欄外に二重丸印

以上の書き入れを見ると、物語内年譜の確認(1)、誤植の訂正(6)、設定の確認(12)、初江の眼差し(2・16)、歌島の風土・土地柄に関するもの(5・8・15)、「海」の描写(3・4・7・10)、何かを「待つ」描写(2・9・11・13・14)といった箇所に着目していることが分かる。「待つ」という語に関しては、『近代能楽集』(「班女」)でも関心を寄せていた。

(2) 『近代能楽集』(「班女」)における書入

『近代能楽集』(「班女」)の初出は、一九五五年一月である。雑誌『新潮』に、「班女」―近代能楽集の内―との題で掲載された。翌年四月に、新潮社から『近代能楽集』として刊行されているが、そのどちらにも書入が見られる。まずは初出誌から見ていく。

『新潮第52巻第1号』(MNS1955)へ一九五五・一 新潮社へは、総頁数二八四、二一センチ、定価一三〇円。一六三頁から一七一頁にかけて、三島の『班女』―近代能楽集の内―が掲載された。

(1) 実子 (前略)「狂女の悲恋、井の頭線何がし駅の古風なロマンス、：

何がし駅頭では、照る日も降る日も、一本の扇を抱きかかへて、待合室のベンチにかけてある美しい狂女の姿が見られる。駅から下りる男ごとに、彼女は顔をのぞいてためし、又失望してベンチに腰かける。貴社の質問に答へて云ふには、これは班女の扇である。あるところを知り合つた男が、又会ふ日のしるしに扇を交換した。今狂女の抱へてゐるのは、雪景色をゑがいた男の扇、不実な男がつてゐるのは、夕顔の花をゑがいた彼女の扇。男はいつかな現れず、待ちこがれた末に

狂つたのだといふ。狂女の名は花子といひ、駅員の話では、何がし町三十五番地女流画家本田実子さんの家に同居してゐるといふ（中略）

…さうして追ひつめられたら、（笑ふ）死ねばいいのよ。

*「狂女」と「雪景色」、「男」と「夕顔の花」を線で繋ぐ

*「狂女の悲恋〜同居してゐるといふ」までを丸括弧で括る

*「死ねばいいのよ」の下に「オソロシイ科白」との書入

(2) 花子 今日私、駅で待つてゐたの、いつまでも、いつまでも。待つてゐるために私、生まれてきたのね。電車から下りてくる人の顔を見

た。みんなちがつてゐた。みんな別の顔の人だつた。私、吉雄さん以外の人の顔は、誰も生きてゐる顔に見えないの。世界中の男の顔は、みんな死んでゐるんだわ。みんな髑髏なんだわ。駅から鞆を下げて、頭蓋骨だけの人が大ぜい下りて来たわ。私疲れた。ねえ、実子さん。

私今日も一日待つたのね。

*「今日も私〜私今日も一日待つたのね」までを丸括弧で括る

(3) 実子 私は何もを待つたことなんか一度もない。*

*欄外（上）にチェックマーク

(4) 花子 あなたはそれでいいのよ、あなたは待つたりしなくていいのよ。でも世の中には、待たなくてはならない人もゐるのよ、私、体のなかがつつことばい。夕顔には夕闇が、朝顔には朝が必ず来るのに、待つ、松、さう、私の体のなかはちくちくする松葉でばい。ねえ、人間つて、

待つたり待たせたりして生きてゆくものぢやない？ 生きてゐること

が、待つてゐるはうにだけ向つてゐたりしたら、どうなつて？ （ト自

分の体を指さして）これは私の体なの？ 私はしまらない窓なの？ し

まらない戸なの？（ト戸口を指さして）あの戸のやうに。…：眠らな

いで生きてゆくことなんて出来て？ 私つて眠らない人形なの？

*「あなたはそれで〜眠らない人形なの？」までを丸括弧で括る

(5) 実子 待つてゐたおかげで、世の中の美しいものが、みんなあなたに

そなはつてしまつたのよ。どこかの女が、ある朝お乳房を失くす。さうするとそのお乳房は、あなたの胸に輝いてゐたんだわ。すばらしい香りのある、肉の勲章のやうに。男が戦つて捷ちとるものを、あなたは待つてゐて捷ちとつたのよ。

*「戦つて」「待つてゐて」に傍点

(6) 実子 吉雄さんを探しに行くのよ。

*欄外に「旅への誘ひ」との書入

(7) 実子（ギクリとなし）逃げるつて？

(8) 花子 あなたは待たないからだわ。決して待たない人だからだわ。待たない人は逃げるんだわ。

*丸で囲んだ「待たない」「逃げるんだわ」に傍点

(9) 実子 いい？ (ト相手を椅子に掛けさせ、のしかかつて、説得する調子で) あなたはもう十分待ったの。

(10) 実子 ええ、それがこの私、もうかれこれ四十になる独り者の画描きですわ。今から一年半も前、あの町へ写生旅行に行きました。人よばれて行つた料亭で、芸者のあひだにあの人の噂が出ました。ある夏東京から来た若いお客と、あの人が会つてから、男は又来ると言ひ置いて、しるしに扇をとりかへてかへつたんです、あの人は毎日扇を見ては男を思ひ、男の来るのを待ち暮しました。どこかのお座敷へもでないやうになり、女将にはさいなまれ、たうとう可哀想に気が違ひました。その噂がでたものですから、私はぜひにと言つて会はしてもらひました。あの人は暗い牢屋のやうな部屋で、うつむいて、白い小さな手にしつかり扇を持つて、私の入つてゆくにも気がつかないふうでした。声をかけるとやつと顔をあげました。まるで月が暈をかぶつたやうな、その無心の顔の美しかったこと。一目で私は好きになつてしまつたんです。私は花子さんを落籍せて東京へつれかへるとき、はつきり心に誓ひました。この人を決してその不実な男に奪はれてはならない、と。

*「ぎですわ。今から一年半も前ゝ奪はれてはならない、と」まで丸括弧で括る(「ええ、それがゝ独り者の画描」までは前頁)

(11) 実子 あの人の不幸は美しくて、完全無欠です。

(12) 実子 私の仕合せは、あなたなんぞにわからないものなんですよ。私は誰にも愛されない女ですわ。子供のときからさうだつたんです。だから私は何も待ちませんでした。けふまでずつと一人で来ました。そればかりぢやありません。万一私を愛する人が出て来たら、その人を私は憎むだらうと思ふまでになりました。私を愛するなんて、男として許せないことですわ。……ですから私は、夢みてゐた生活をはじめたんです。私以外の何かを心から愛してゐる人を私の擒にすること。どう？ 私の望みのない愛を、私に代つて、世にも美しい姿で生きてくれる人。その愛が報いられないあひだは、その人の心はわたしの心なの。

*「夢みてゐたくその人の心は私の心なの」まで丸括弧で括る

(13) 実子 今さらあの人がためされはしませんわ。あの人は完全無欠な、誰も動かしやうのない宝石なんです。狂気の宝石。あなたのやうな石ころに誰が。

(14) 花子(永き間。――頭をかすかに振る)ちがふわ。あなたはさうぢやない。

(15) 花子 いいえ、よく似てゐるわ。夢にまで見たお顔にそっくりだわ。でもちがふの。世界中の男の顔は死んでゐて、吉雄さんのお顔だけは生きてゐたの。あなたはちがふわ。あなたのお顔は死んでゐるんだもの。

*「生きてゐたの」に傍点

(16) 花子 あなたも髑髏だわ。骨だけのお顔。骨だけのうつろな目で、どうして私をそんなに見るの？

(17) 花子 見てゐるのよ、あなたよりもつとしつかり見てゐるのよ。(実子に) 実子さん、又私をだます気なのね。だましてむりやりに、旅へつれてゆくつもりなのね。こんな知らない人を呼んできて、吉雄さんなんて言はせたのね。待つことを、きのふも、けふも、あしたも、同じように待つことを、私に諦めさせようといふつもりなのね。……私は諦めないわ。もつと待つわ。もつともつと待つ力が私に残つてゐるわ。私は生きてゐるわ。死んだ人の顔はすぐわかるの。

(18) 花子 (再び扇を弄びつ、) 待つのおね。待つて、待つて、……さうして日が暮れる。

(19) 花子 私は待つ。

(20) 花子 私は待つ。……かうして今日も日が暮れるのね。

(21) 実子 (目をかがやかして) すばらしい人生！

* 欄外に「打俵びて呼ばはむこゑに山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ―読人しらず」との書入

次に、単行本における書入を見ていきたい。「近代能楽集」(MA MiO-14)

へ二九五六・四 新潮社)は、総頁数二二二、二〇センチ、定価四三〇円、夫婦函付き、著者署名が青ペンで入れられた初版本である。保存状態は非常に良い。なお、『近代能楽集』のうち書入が行われているのは、「班女」のみである。

(1) 花子 あなたはそれでいいのよ、あなたは待つたりしなくていいのよ。でも世の中には、待たなくてはならない人もゐるのよ、私、体のなが、待つことで一ぱい。夕顔には夕闇が、朝顔には朝が必ず来るのに、待つ、松、さう、私の体のなかはちくちくする松葉で一ぱい。ねえ、人間つて、待つたり待たせたりして生きてゆくものぢやない？ 生きてゐることが、待つてゐるはうにだけ向つてゐたりしたら、どうなつて？ (ト自分の体を指さして) これは私の体なの？ 私はしまらない窓なの？ しまらない戸なの？ (ト戸口を指さして) あの戸のやうに。……眠らないで生きてゆくことなんて出来て？ 私つて眠らない人形なの？ *「あなたはそれでゝ眠らない人形なの？」までを丸括弧で括る

(2) 実子 待つてゐたおかげで、世の中の美しいものが、みんなあなたにそなはつてしまつたのよ。どこかの女が、ある朝お乳房を失くす。さうするとそのお乳房は、あなたの胸に輝いてゐたんだわ。すばらしい香りのある、肉の勲章のやうに。男が戦つて捷ちとるものを、あなたは待つてゐて捷ちとつたのよ。

(3) 実子 吉雄さんを探しに行くのよ。今夜でも早速発たないこと？ か

うして待つてゐても仕方がないから、日本国中、あの人を探して歩くよ。村から村へ、町から町へ、二人して旅をしたらどんなにたのしいでせう。

(4) 実子 いい？ (ト相手を椅子にかけさせ、のしかかつて、説得する調子で) あなたはもう十分待つたの。十分待つて、もしあの人があなたに会つたら、二度と離れられなくなるほど美しくなつたのよ。いい？ 今度は待つことをやめて、これから探しに出なければならぬの。

(5) 実子 私の仕合せは、あなたなんぞにわからないものなんです。私は誰にも愛されない女ですわ。子供のときからさうだつたんです。だから私は何も待ちませんでした。

(6) 実子 今さらあの人のためされはしませんわ。あの方は完全無欠な、誰も動かしやうのない宝石なんです。狂気の宝石。あなたのやうな石ころに誰が。

清水は一九五五年三月に「班女の扇^{*}」と題する文章を書き、その中で「これの文学の血脈のなかに、日本の古典、とくに王朝文学の伝統が色濃く流れており、その伝統の地盤の上に、ギリシャ悲劇の伝統をどう移入するか、最近のかれの努力は傾注されているといつてよい」「東西の伝統の交流点に生まれた作品がこの『班女』である」と述べている。また、この戯曲は、花子が「最も純粹で、最も受動的な『待つ恋』」の中で「『無心』の人

間としての狂人」——「狂気の宝石」となり、完璧な「不幸の美」を完成させる悲劇であるとの指摘を行っている。先に述べたように、「班女」の初出は一九五五年一月であり、単行本『近代能楽集』の刊行は翌年の四月である。初出誌への書入は、清水が「班女の扇」を執筆する前であろうと推察されるが、単行本の書入は、発表後ということになる。清水がこの作品に着目していたことは、二度にわたる書入からも明らかである。

初出誌と単行本との書入を比較すると、前者では花子と実子、双方のセリフにチェックが入っているのに対して、後者ではほぼ実子のセリフのみラインを引いていることに気づかされる。「班女の扇」における言及と合わせて考えてみるならば、初出誌書入の時点では、清水は実子よりも、花子に着目していたようである。欄外に記された古今集五三九番の「打佐びて呼ばはむこゑに山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ」は、吉雄の訪れを一途に「待つ」花子の心情から連想された歌であろう。単行本書入の方では、初出誌と重複してチェックされている箇所もあるのだが、一例を除いて全て実子のセリフにラインが引かれている。ここでは、実子の思考と行動に着目しているようだ。

清水が三島文学の中で「待つ」という語に意識を向けているのは非常に興味深いことのように思われる。「待つ」とは、何か、例えば物事や人、時が来ることを期待して、それまでの時間を過ごすことである。極めて受動的な行為だと言えるだろう。三島文学に登場する認識者たちは、ひたすらに何かを「待つ」。戦争により「金閣寺」が消失することを「待つ」溝口、退屈な日常からの脱出すなわち世界の崩壊を「待つ」清一郎や鏡子、空飛ぶ円盤の出現を「待つ」大杉一家、清頭の生まれ変わりを「待つ」本多、し

かし「待つてゐて」も望んだものは来ない。

「夕な夕な窓に立ち椿事を待つた」^{*7}少年は、「もう待てぬ^{*8}。」と言い残し自ら死を選ぶ。始まりから終わりまで「待つ」という語に表象される人生であり、文学であった。清水はそのことにいち早く気づいていたのではあるまいか。

四 おわりに

清水は、特に三島自決の後は、彼について多くを語ることはなかったという。しかし、旧蔵資料に残された大量の書入は、語られなかった三島と三島文学について多くのことを提示するであろうと予想される。筆圧の弱さと、独特な崩しがなされた書体による清水の書入は、翻刻にかなり時間を要すると思われるが、慎重に作業を進め、随時報告を行いたい。

最後になったが、文庫の調査にあたって本学大学院生、大和洗平氏の協力を得た。また、書人の翻刻に際して、日本語文化コースの土橋幸正、宇野憲治、岡先生から御教示を頂いた。伏して感謝申し上げます。

*1 有元伸子「公開講座記録 比治山大学〈三島由紀夫文庫〉の特徴について」(『日本語文化研究(5)』二〇〇二年二月)。

*2 東文彦の遺稿集『浅間』を除き、全て三島の著作物である。

*3 有元伸子(「前掲誌」)は、三島は「師に贈呈する本を選んて」¹おり、「『不道徳教育講座』や『反貞女大学』といったエンターテイメント色の強いもの」は回避していたのではないかと、その見解を示している。

*4 有元伸子(「前掲誌」)は、たとえば、『文化防衛論』の書き込みは、

「あるいは、三島の自死後、その意味を求めて著作にあたったときのものであるうか」との推測を行っている。

*5 清水文雄「班女の扇」(「はたち7」一九五五年三月)

*6 『文學的人生論』(MA MiO 11) (一九五四年一月 新潮社)に収められた「班女」²「拝見」にも多くの書入が見られる。

*7 三島由紀夫「凶ごと」(引用は『三島由紀夫全集 第三七巻』二〇〇四年四月 新潮社)。全集解題には、成立年月日は不明であるが、この詩を収録した「Bad Poems」と題されたノートの成立は、「昭和一五年一月二八日」と推測される、とある。

*8 三島由紀夫「激」(「楯の会ちらし」一九七〇年一月二五日へ引用は『三島由紀夫全集第三六巻』二〇〇三年一月 新潮社)。

『潮騒』「班女」(初出誌・単行本)の本文引用は、全て比治山大学「三島由紀夫文庫」蔵本に拠る。但し、ルビ・傍点は省略し、旧字は新字に改めた。

〈キーワード〉

比治山大学蔵「三島由紀夫文庫」、清水文雄、『潮騒』、「班女」、「待つ」

(九内 悠水子 言語文化学科 日本語文化コース)

(二〇二二・一一・二二 受理)

表 1 比治山大学「三島由紀夫文庫」清水文雄日蔵資料(単行本)リスト

タイトル	整理番号	出版社	発行年	総頁数	サイズ	価格	署名	外装	版	書入	その他
花ざかりの森	MAMf0-1	七文書院	1944・10	247	20 cm	5 円	筆	カバー	初		著作者略歴に加筆修正(大正四十年生→大正拾四年生)
花ざかりの森	MAMf0-2	雲井書店	1951・8	200	17 cm	120 円	ペン	帯	初	メモ	挟み込まれた読者カードにメモ
峠にての物語	MAMf0-3	櫻井書店	1947・11	146	18 cm	50 円	筆		初		
盗賊	MAMf0-4	眞光社	1948・11	228	19 cm	140 円	筆		初		
夜の仕度	MAMf0-5	鎌倉文庫	1948・12	274	18 cm	180 円	筆		初		
假面の告白	MAMf0-6	河出書房	1949・7	279	19 cm	200 円		カバー	3版	ライオン	
愛の渴き	MAMf0-7	新潮社	1950・6	248	19 cm	200 円	ペン	カバー・帯	初		
禁色 第一部	MAMf0-8	新潮社	1951・11	300	19 cm	260 円	ペン	カバー	(初)		初版2刷
禁色 第二部	MAMf0-9	新潮社	1953・9	306	19 cm	290 円	ペン	カバー	初		
潮騒	MAMf0-10	新潮社	1954・6	240	20 cm	280 円	ペン	帯・カバー	初	ライオン・書入	受贈日(一九五四・六・一一)書入
文學的人生論	MAMf0-11	河出書房	1954・11	219	17 cm	120 円		帯・カバー	初	ライオン・書入	
沈める漣	MAMf0-12	中央公論社	1955・4	321	20 cm	250 円	ペン	帯・カバー	再		
小説家の休暇	MAMf0-13	講談社	1955・11	178	17 cm	100 円	ペン		初	ライオン・書入	
近代能楽集	MAMf0-14	新潮社	1956・4	212	20 cm	430 円	ペン	夫婦函	初	ライオン	
詩を書く少年	MAMf0-15	角川書店	1956・6	198	17 cm	110 円			初		
金閣寺	MAMf0-16	新潮社	1956・10	263	20 cm	280 円		帯・カバー	15版		
現代小説は古典たり得るか	MAMf0-17	新潮社	1957・9	193	18 cm	200 円	ペン	帯・カバー	初	ライオン	受贈日(昭和三十三年九月十九日)書入
橋づくし	MAMf0-18	文藝春秋新社	1958・1	223	20 cm	290 円	ペン	函	初		
不道徳教育講座	MAMf0-19	中央公論社	1959・3	181	20 cm	200 円		カバー	初		
文章読本	MAMf0-20	中央公論社	1959・1	159	17 cm	(150 円)					『婦人公論』昭和34年1月号別冊付録として制作、価格(150円)は雑誌代
文章読本	MAMf0-21	中央公論社	1959・6	207	23 cm	300 円	ペン	函	初		署名横書き
鏡子の家 第一部	MAMf0-22	新潮社	1959・9	247	20 cm	290 円	ペン	函帯・函	初		
鏡子の家 第二部	MAMf0-23	新潮社	1959・9	233	20 cm	290 円	ペン	函帯・函	初		
純不道徳教育講座	MAMf0-24	中央公論社	1960・2	241	20 cm	260 円		カバー	初		
宴のあと	MAMf0-25	新潮社	1960・11	295	22 cm	390 円	筆	函・カバー	初		署名半紙貼付
スタア	MAMf0-26	新潮社	1961・1	182	20 cm	230 円	(ペン)	函	初		名刺貼付(肩書き無し、住所、電話番号入)、新聞記事貼付(S36・3・10『朝日新聞』/書評「スタア」)
獣の戯れ	MAMf0-27	新潮社	1961・9	207	20 cm	290 円	筆	帯・カバー	初		署名半紙貼付
美の襲撃	MAMf0-28	講談社	1961・11	364	20 cm	450 円	ボールペン	カバー	初		

タイトル	整理番号	出版社	発行年	総頁数	サイズ	価格	署名	外装	版	書入	その他
美しい星	MAMI0-29	新潮社	1962・10	298	20 cm	400 円	ペシ	帯・カバー	初	ライソ・書入	受贈日(昭和廿八年九月中旬)書入
林房雄論	MAMI0-30	新潮社	1963・8	127	20 cm	800 円	ペシ	函帯・函	初	ライソ・書入	受贈日(昭和廿八年九月廿一日)書入、新聞記事 貼付(S39・11・29)『朝日新聞』/文芸時評(林房雄)
午後の史航	MAMI0-31	講談社	1963・9	260	20 cm	350 円	ペシ	帯・カバー	初		
剣	MAMI0-32	講談社	1963・12	232	22 cm	480 円	ペシ	函帯・函	初		
私の遍歴時代	MAMI0-33	講談社	1964・4	266	20 cm	420 円	ペシ	函	初	ライソ・書入	受贈日(昭和三十九年五月十五日)書入
絹と明察	MAMI0-34	講談社	1964・10	299	22 cm	650 円	ペシ	函帯・函	初		受贈日(昭和三十九年十月三十一日)書入
音楽	MAMI0-35	新潮社	1970・2	211	16 cm	110 円			初		新潮文庫、東京大丸レシート挟込
不道徳教育講座	MAMI0-36	角川書店	1967・11	342	15 cm	150 円		カバー	初		角川文庫
三熊野詣	MAMI0-37	新潮社	1965・7	204	20 cm	400 円	ペシ	函帯・函	初		受贈日(昭和四十年八月廿日)書入
サト公爵夫人	MAMI0-38	河出書房新社	1965・11	160	20 cm	580 円	ペシ	函帯・函	初		NIT公演チラシ(サト侯爵夫人「信天翁」)、 NITアンケート用紙、「サト侯爵夫人公演チケッ ト半券(S4 0・11・25 18:30開演 M列18番)、 受贈日(昭和四十年十一月二十五日)書入 初版3刷
反貞女大学	MAMI0-39	新潮社	1966・3	213	20 cm	300 円		帯・カバー	(初)		
憂國	MAMI0-40	新潮社	1966・4	138	26 cm	1500 円	ペシ	帯	初		
対話・日本人論	MAMI0-41	香山書房	1966・10	221	20 cm	380 円	ペシ	背抜き函	初		受贈日(昭和四十一年一月五日)書入
荒野より	MAMI0-42	中央公論社	1967・3	334	20 cm	580 円	ペシ	函帯・函	初		受贈日(昭和四十二年三月十三日)
芸術の顔	MAMI0-43	香山書房	1967・7	246	18 cm	340 円	ペシ	帯	初		旧所蔵者入手日(昭和四十五年十二月廿一日)書入
葉隠入門	MAMI0-44	光文社	1967・9	289	18 cm	340 円		カバー	初	ライソ	
朱雀家の滅亡	MAMI0-45	河出書房	1967・10	144	20 cm	480 円	ペシ	函帯・函	初		
対談 人間と文学	MAMI0-46	講談社	1968・4	229	19 cm	450 円	ペシ	函帯・函	初	ライソ・書入	
対談 人間と文学	MAMI0-47	講談社	1968・4	229	19 cm	450 円		函帯・函	初		
三島由紀夫ライター教室	MAMI0-48	新潮社	1968・7	199	18 cm	300 円		帯・カバー	初		
わか友ヒットラー	MAMI0-49	新潮社	1968・12	144	20 cm	400 円	サインペン	函帯・函	初		新聞記事貼付(1969・2・31『朝日新聞』/演 劇評「わか友ヒットラー」)、受贈日(昭和 四十四年一月十日)書入
太陽と鉄	MAMI0-50	講談社	1968・10	150	24 cm	680 円	ペシ	函帯・函・カバー	初		受贈日(昭和四十三年十一月五日)書入
春の雪 豊饒の海第一巻	MAMI0-51	新潮社	1969・1	369	20 cm	680 円	筆	函帯・函・カバー	初		新聞広告貼付(1969・4・10『中国新聞』/『春の雪』 「晩の寺」)、受贈日(昭和四十四年一月十日)書入
奔馬 豊饒の海第二巻	MAMI0-52	新潮社	1969・2	402	20 cm	720 円	筆	函帯・函・カバー	初		受贈日(昭和四十四年二月二十八日)書入

タイトル	整理番号	出版社	発行年	総頁数	サイズ	価格	署名	外装	版	書入	その他
討論 三島由紀夫VS.東大全共闘	MAMM0-53	新潮社	1969・7	177	19 cm	250 円		帯・カバパー	(初)	ライオン	初版2刷、新聞広告貼付〔討論 三島由紀夫VS東大全共闘〕
瀧王のテラス	MAMM0-54	中央公論社	1969・6	159	20 cm	650 円	(ペン)	函帯・函	初	ライオン	名刺貼付(名前のみ)
若きサムライのために	MAMM0-55	日本教文社	1969・8	218	19 cm	350 円		カバパー	4版		
椿説弓張月	MAMM0-56	中央公論社	1969・11	88	19 cm	4800 円		夫婦函	限定		和綴、限定(68/1000)
三島由紀夫文学論	MAMM0-57	講談社	1970・3	495	20 cm	980 円		函帯・函・カバパー	初	ライオン	
暁の寺 豊饒の海第三巻	MAMM0-58	新潮社	1970・7	341	20 cm	660 円	筆		初		新聞記事貼付(1970.9.14〔朝日新聞〕書評「暁の寺」)
尚武のころ	MAMM0-59	日本教文社	1970・9	218	19 cm	400 円		カバパー	初	ライオン	挟み込まれた読者カードにメモ
行動学入門	MAMM0-60	文藝春秋	1970・11	249	19 cm	450 円		帯・カバパー	(初)	メモ、ライオン	初版3刷
源泉の感情	MAMM0-61	河出書房新社	1970・10	316	20 cm	680 円		帯・カバパー	初		
作家論	MAMM0-62	中央公論社	1970・10	249	20 cm	580 円		函	初		受贈日(昭和四十六年三月七日)書入、献呈付箋貼り付け(謹呈 三島瑠子)
蘭陵王	MAMM0-63	新潮社	1971・5	355	20 cm	800 円		函・帯	初		受贈日(昭和四十六年三月七日)書入、献呈付箋貼り付け(謹呈 三島瑠子)
天人五衰 豊饒の海第四巻	MAMM0-64	新潮社	1971・2	271	20 cm	580 円		函・帯・カバパー	初		
三島由紀夫十代作品集	MAMM0-65	新潮社	1971・1	286	19 cm	450 円		帯・カバパー	初		献呈付箋貼付(謹呈 三島瑠子)、受贈日(S46.3.7)書入
三島由紀夫十代作品集	MAMM0-66	新潮社	1971・1	286	19 cm	450 円		帯・カバパー			旧蔵者入手日(昭和四十六年三月七日)書入
小説とは何か	MAMM0-67	新潮社	1972・3	127	20 cm	400 円		帯・カバパー	初	ライオン・書入	献呈付箋貼付(謹呈 平岡瑠子)、受贈日(昭和四十七年四月十五日)書入
日本文学小史	MAMM0-68	講談社	1972・11	166	20 cm	690 円		函・帯	初	ライオン・書入	
わか思春期	MAMM0-69	集英社	1973・3	148	18 cm	490 円		函・帯	3版		
文化防衛論	MAMM0-70	新潮社	1969・4	268	19 cm	400 円		帯・カバパー	初	ライオン・書入	
浅間	MAMM0-71	新潮社	1944・7	385	21 cm			カバパー	初		
プリタニキエス	MAMM0-72	新潮社	1957・5	137	17 cm	200 円		カバパー	初		
対話・思想の発生	MAMM0-73	番町書房	1967・11	270	19 cm	460 円		帯・カバパー	初	ライオン・書入	
戦後派作家は語る	MAMM0-74	筑摩書房	1971・2	214	20 cm	600 円		帯・カバパー	(初)	ライオン	初版2刷

* 「清水文雄生旧蔵 三島由起夫文庫目録」(1993・3 比治山大学)に附されている整理番号と異なるのは、図書整理にあたって、番号を振り直したためである。

* 受贈日の記載に関して、西暦と年号が混ざっているのは、清水の表記に拠ったためである。

* 『音楽』(MAMM0-35)に挟み込まれた東京大丸レシートは、その価格(110円)から、本書購入時のものと推測される。

* 『瀧王のテラス』(MAMM0-54)の名刺は、セロハンテープで貼り付けられ、各利が内装紙のタイトルの一部を隠している。よって、三島ではなく清水によって貼り付けられたのではないかと推測される。そうすると、半紙に記された『宴のあと』(MAMM0-25)、『野の戯れ』(MAMM0-27)の署名も、清水によって貼り付けられた可能性がある。

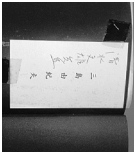


写真4

『瀧王のテラス』(MAMM0-54)